

『オルレアンの処女』と一八〇〇年前後のドイツ

菅 利 恵

要旨：一八〇〇年前のドイツ語圏においては、ナポレオン戦争のために市民の政治的なアイデンティティ形成に転換期が訪れ、コスモポリタンの啓蒙時代からナショナリズムの時代への移行が始まりつつあった。この過渡期にあって、シラーは時代状況をどのように見据え、これにどう取り組もうとしたのだろうか。本論文は、『オルレアンの処女』と時代状況との関わりを探りながらこれを明らかにするものである。

まず、私的な愛の描写を手がかりに、この作品に描かれた世界とこれが書かれた当時の時代状況との関係性を示す。啓蒙時代の言説空間においては、私的な愛が政治的な戦いの後楯として機能した。しかし『オルレアンの処女』では愛のそうした機能が失われ、政治的な情熱が「人間的なもの」として発露するための一つの重要な契機が失われている。そのような作品の構造は、コスモポリタニズムとナポレオン戦争のはざままで、戦うための理念を手にすることができない時代状況をすくいとっていると考えられる。

次に、『オルレアンの処女』の筋書きを検討し、作者がこの作品世界を通して上述の時代状況にどのような省察を加えたのかを探る。この作品では、政治的な戦いが理念的な後楯を持たない状況が作り出された上で、「神との約束」というかたちで戦うための理念が人間社会の外から与えられている。そして筋の展開を通して、この理念を人間の社会に取り込むことの不可能性が浮き彫りにされている。さらに、主人公ジャンヌが神の後楯を失ってなお戦い続ける姿に、そのような不可能性を抱えたまま侵略への自らの怒りに向き合うしかない、という作者の現状認識を読み取ることができる。

政治的な自己主張が必要な危機の時代にあるにもかかわらず、そのような自己主張の拠り所が決定的に失われているという現実を認識した上で、それでも可能な自己主張のかたちを模索する作者のあり方が、この作品には明らかにされている。

序

十五世紀半ばにイギリスがフランス北部を制圧して王国をわがものにしようとしたとき、神の声を聞いたという少女が彗星のごとくあらわれて、強烈なカリスマ性でフランス勢を導きシャルル七世の勝利をもたらした——有名なジャンヌ・ダルクの逸話である。この歴史上の逸話を題材にしてフリードリヒ・シラーが戯曲『オルレアンの処女』を書いたのは、一八〇〇年七月から一八〇一年四月にかけてのことである。それはドイツ語圏が政治的な激震に見舞われ、先の見えない混乱に突き落とされた時期であった。一七九二年、オーストリアとプロイセンはフランス革命への干渉戦争に突入する。しかしフランス革命軍はドイツ勢を圧倒し、ナポレオン率いる一隊が一七九六年イタリアでオーストリア軍を破ると、ドイツ勢の敗色は決定的になった。一八〇一年二月、リュネヴィル条約によりフランスがライン左岸を併合。結果としてドイツ側の多くの領土が失われて神聖ローマ帝国の崩壊がもたらされる。

この緊迫した時代状況と『オルレアンの処女』との関わりについては、第二次大戦後のシラー

研究において長い間光が当てられてこなかった。¹⁾ 一九世紀にドイツ語圏のナショナリズムが急速に膨張したとき、シラーの『オルレ안의処女』は『ヴィルヘルム・テル』とならんで祖国愛を投影させるかっこうの受け皿となった。そのため戦後シラーの作品からナショナリズムのイメージをそぎおとそうとする磁場が働き、結果的に作品分析において政治的な背景を軽視する風潮が生まれた。²⁾ 『オルレ안의処女』についても、超越性の問題や美的な理念に焦点を当てた研究が主流だったのである。³⁾ 近年になってようやく、この作品と時代との関わりを位置づけなおす試みが始められている。⁴⁾

この新たな試みの特徴は、『オルレ안의処女』の作品世界をもっぱら同時代のパトリオティズムの高まりの中に位置づけていることである。ナポレオン戦争にともなう激動の中で、ドイツ語圏では祖国防衛の課題が浮上して愛国的な言説が活力を持ち、初期ナショナリズムの胎動が始まった。アルトはその『オルレ안의処女』論において、こうした状況こそがこの作品世界の背景にあるとし、祖国防衛に殉じたジャンヌの姿を通して「宗教的に高められたパトリオティズム」が描かれていると論じた。⁵⁾ またポットもこれを「愛国的な時代の空気をくみとった」作品としてとらえている。⁶⁾

祖国防衛の主題を持つ『オルレ안의処女』が、神聖ローマ帝国の崩壊を前にしたドイツ語圏の危機的状況、およびその中で高められたパトリオティズムと無関係であるはずもない。だが注意せねばならないのは、当時ナショナリズム的徴候が育まれたのは事実としても、それはまだ社会に支配的な空気とまではなっていなかったということである。一八一〇年代、すなわちナポレオンによる制圧後に解放運動の気運が高められた時期とは違って、一八〇〇年前後にはまだ市民知識層の政治意識も一つの方向性に集約されておらず、政治的な問題意識に与える言葉そのものが模索される、きわめて流動的で過渡的な時期であった。つまり『オルレ안의処女』が時代の空気に深く根ざした作品であるとしても、この空気を単純に「パトリオティズムの高揚」という点においてのみとらえることはできないのである。以下では当時の政治的動向に対するシラーの姿勢をも考慮しつつ、この作品に描かれた世界と時代状況との関わりをとらえなおしてみたい。

1. 『オルレ안의処女』の基本構造：戦うための理念の消失

1-1.

『オルレ안의処女』は、フランスのシャルル七世が窮地に立たされた状況からはじまる。シャルル六世の没後、息子であるシャルル七世は、フランス王として正式に認められないままにイギリスと手を結んだブルゴーニュ派と争っていた。フランス北部のノルマンディーはすでにイギリス軍に占領されており、さらにロワール川沿いのオルレアンも包囲されている。実の母もブルゴーニュ派に付いてシャルル七世は孤立し、オルレアンも落とされたならば国を去ってイギリスの支配をゆるすしかない。

そのようにフランスの地が脅かされている状況は、この作品に描かれた人々にも確かに「危機」として認識されている。ジャンヌの父チボーはこう嘆く。

なあご近所の衆、今日のわれらはまだフランス国民だ。まだ自由な民で、ご先祖さまが耕しなされたこの昔からの土地のあるじだ。だが、あすはだれがわれらに命令しているか、

わかったものではない。なにしろ、どこへ行ってもイギリス人が勝ち戦の旗をなびかせて、このフランスの実った田畑を馬で踏み荒らしているんだからな。」(NA 9, 167)

ここで注目したいのは、チボーが自らの嘆きの対象である「祖国の危機」を、どうしても打開せねばならないとは全く考えていないという事実である。「フランス国民」でいられなくなるという考えは、彼にとってたしかに不快なものではあるが、だからといって彼に「フランスを守ろう」という考えが積極的に生まれるわけではない。先行きの見通せない乱世を乗り切るために彼がまず考えたのは、三人の娘たちに「戦争の乱れた世の中で守ってくれる者」(NA 9, 167) を見つけて結婚させることであった。末娘のジャンヌが祖国防衛を熱っぽく唱えても、彼には分不相応な思い上がりとしか思えない。ジャンヌの言葉を無視して彼は言う。

わしらは平和な百姓だ。(・・・) 誰が戦に勝って国王になるか、成り行きを待つとしよう。(・・・) さあ、さあ、仕事にかかろう。だれでも、身近なことだけを考えなされ。国の奪い合いはえらい方々やご領主たちに勝手にやらせておけ。いくら壊されても、わしらは平気なものさ。わしらの耕す大地は、どんな嵐にも揺れるものではないからな。(NA 9, 179 f.)

祖国防衛にける情熱が希薄なのはチボーだけではない。イギリスに王位を脅かされ、誰よりも追いつめられているはずのシャルル七世もまた、ここでは戦う情熱の弱い人間として登場する。実の母までもがブルゴーニュ派に味方をして勝つ見込みが失われている現状は、彼から目に見えて戦意を奪ってしまう。血はもう十分に流れたからと、彼はあっさりと戦いから身を引くことを口にし、驚いてこれをとめようとする側近の者たちにこう反論する。

ソロモンに裁かれた母親の真似をして、わたしの子である人民たちの仲を剣で引き裂けというのか。いや、わたしは人民を手放そう、かれらが平和に生きるのならば。(NA 9, 197)

シャルル七世は優しく文芸を愛し、民の生活を気にかける愛に満ちた支配者として描かれている。そんな彼に、どのような犠牲を払っても他国の侵略を撃退するという思考回路はない。他国が攻めてきたからといって、なぜこれに徹底的に対抗せねばならないのか。平和を失い、人民の命を失ってまでなぜ侵略を拒まねばならないのか。側近の者たちも、このような王の「戦わない論理」に対して、説得力のある反論を打ち出すことはできない。有力な騎士デュノアは言う。「王者の血筋にふさわしくない気弱な同情を、なにとぞ、おやめください。(・・・) 人民は国王のためには一身をなげうたねばなりません。これこそこの世の運命、この世の掟でございます」(NA 9, 197) けれども、先に見たチボーの言葉にわかるとおり、人民の側にそのような「掟」の観念は共有されていないのであり、デュノアの言葉もただ空しく響くばかりである。

このように『オルレアンの処女』には、フランスの危機をあえて打開せねばならない理由が見失われた状況が描き出されている。しかもこの状況は、ただ追いつめられたフランスの絶望的な空気を表現しているだけでなく、ここに描かれた世界そのものの、基本的な特徴から導きだされているように思われる。次節ではこの特徴を「愛」という主題に注目して明らかにしたい。

1-2.

『オルレアンの処女』に描かれた世界は、一八世紀後期の市民的な言説空間に生まれたものとしてはきわめて特異な側面を持っている。以下に見るように、ここでは私的な愛に与えられた機能が、同時代の市民的な言説ともシラー自身の他の作品とも大きく異なっているのだ。

ドイツ語圏の一八世紀後半においては、劇作品や小説の中で感傷的な親子関係が盛んに描かれた。家族を愛する「優しい父親 der zärtliche Vater」と道徳的で父親思いの娘が織りなす情緒的な親子関係の描写は、とりわけレッシングらの市民悲劇によって広められて、一八〇〇年前後においても、親子愛を感傷的に描いたイフランドらの家庭劇が人気を博していた。シラーもまた、一七八四年に発表された市民悲劇『たくらみと恋』の中で、感傷主義の時代にまさにふさわしく情緒的に彩られた親子の像を描いている。一七八七年発表の『ドン・カルロス』ではスペイン王室を舞台に対立する父子が描かれているが、王子の側が父王に親子の和解を涙ながらにうたえる場面も差し挟まれており、やはりここでも感傷的な親子関係のイメージが本来あるべき形としてその親子描写の前提となっている。

重要なのは、そのように情緒的なものとして強調された私的な愛の描写が、勃興しつつあった市民知識層の自己表現や自己主張の媒体にほかならなかった、ということである。周知のように、啓蒙の時代においては、封建的な秩序関係に対抗しながら「自由と平等」に集約される市民的なイデオロギーを打ち出すことが試みられ、道徳書や文学作品などにおいて、市民的な価値意識が「人間的なもの」として表現され広められたが、その際に、家族愛をはじめとする私的な愛の関係性は、市民的なイデオロギーを具体的に表象する「人間的な」関係性の代表格として位置づけられていた。市民知識層は、私的な愛を「自由と平等」の理念に調和するよう理想化して描き、そうした「人間的な」関係性の表象を通して自らの価値意識の普遍性を宣伝して、社会的また政治的な自己主張への足場を固めたのである。⁸⁾ 文学作品の中で描かれる愛に満ちた感傷的な人間関係は、市民知識層が旧来の社会秩序に対抗して打ち出そうとした価値意識の、理想主義的な表現にほかならなかった。

このように私的な愛を通して市民的な価値意識を表現し主張する、という構造は、シラーの劇作品をも強く刻印している。たとえば『たくらみと恋』の中では女主人公ルイーゼと父親、また彼女と恋人の間できわめて情緒的で濃密な愛の関係性が繰り広げられており、そうした愛の描写こそが、宰相らの住まう宮廷世界の冷たさや非人道ぶりを際立たせ、市民的な家族の領域を普遍的に「人間的な」領域として浮かび上がらせるかたちとなっている。

さらにシラーの作品においては、「人間的なもの」として強調された私的な愛が、文字通り政治的な自己主張の基盤として明確に位置づけられている。『ドン・カルロス』に登場するポーザは、フェリペ王の圧政下でより人間的な政治を実現させるために密かに活動するのだが、その原動力は王子への友情というごく私的で個人的な愛であった。⁹⁾ 『ヴィルヘルム・テル』には、代官暗殺というきわめて政治的な行為が描かれるが、これもまた決して政治的な思惑によるものではなく、もっぱら主人公テルの温かい家族愛に基づいている。¹⁰⁾ さらに断片に終わった『マルタ騎士団』の中では、トルコの軍勢に立ち向かう騎士団の士気を高めるための動力として、親子愛と男同士の恋愛のエピソードが置かれている。この作品では、啓蒙時代に「人間的なもの」の代表的な表現であった感傷的な親子愛と、「自由と平等」の理想が純化されたかたちで込められた男同士の愛が、騎士団の中で失われかけていた戦いへの情熱に今一度火をつけるのである。¹¹⁾ いずれの作品においても、私的な愛こそが政治的な自己主張の原動力であり、

政治的な戦いに身を投じることの正当な理由であり、抑圧に抵抗する戦いに理想主義的な理念を付与して、より高次の意味を与えるという機能を果たしている。

では『オルレアンの処女』において私的な情愛関係はどのように描かれているのだろうか。まず目を引くのは、ジャンヌと父親との関係性が、感傷的な時代風潮を考慮するならば奇異に感じるほどに冷たい、ということである。チボーは感傷的な「優しい父親」とはまったく異なる父親像として描かれており、家族への情愛よりも、家長として家族成員を統率し監督する厳しさのほうを強調されている。自ら用意した無難な人生行路に従わないジャンヌに対して、彼は容赦なく手厳しい。なによりも印象的なのは、この作品では彼こそがジャンヌを「魔女」と告発するということである。ジャンヌは父に背いて神の言葉に従い、フランス側を勝利に導く。それによってシャルル七世はフランス王として名実共に戴冠することになり、その戴冠式で功労者のジャンヌにも荣誉が与えられる。しかしまさにこのときに、父親は自らの娘を、悪魔と結託しているとして公衆の面前で激しく糾弾するのだ。

このように『オルレアンの処女』において家族愛の世界が明らかに後退しているという事実は、すでに指摘した登場人物たちの「戦うモチベーションの希薄さ」と、決して無関係ではないだろう。先に見たように、シラーの他の作品では、啓蒙時代の市民的な言説の構造を背景に、私的な愛こそが政治的な戦いの原動力とされていた。しかしこの重要な原動力が、『オルレアンの処女』の作品世界では決定的に失われているのである。

もちろんこの作品にも情緒的な愛の描写がないわけではない。シャルル七世の宮廷で、彼とその愛妾の関係性には市民的な愛の理想像が投影されており、互いに向けられた誠実な思いが感傷的に強調されている。けれども、支配者の側に託された感傷的な愛は、けっして目の前の抑圧的な力に異議申し立てする際の原動力として機能することはなく、むしろ支配者の側における力の抑制をうながし、「民をこれ以上傷つけてはならない」という「戦わない論理」の方を後押ししている。またもう一つ、ジャンヌとイギリス軍の武将ライオネルとの恋が、情緒的で人間的な愛のエピソードとして差し挟まれているのだが、この愛も政治的な戦いの原動力としては機能しない。それは逆に戦いの理不尽さと非人間性をジャンヌにつきつけて、戦いに邁進する彼女を致命的な混乱に陥れるのであり、やはり戦いを遠ざける方向に影響力を及ぼしている。

『オルレアンの処女』では、シラーの他の作品とは違って、私的な愛が政治的な戦いの後楯としては機能していない。市民的な言説空間においては、私的な愛こそが抑圧に対する戦いに理想主義的な色彩を付与していたにもかかわらず、ここでは愛の政治的な機能が失われ、戦いに高次の意味を与える理念が失われている。つまり政治的な戦いが「人間的なもの」となるための一つの重要な契機が、消えてしまっているのである。

2. 過渡的な時代の表現としての『オルレアンの処女』

シラーについての包括的な研究書を出したミュラー＝ザイデルは、『オルレアンの処女』にみる祖国愛のテーマが、国家膨張に走る一九世紀的なナショナリズムとは一線を画していることを示すために、シラー作品の愛国的な主題においては何よりも自由と解放こそが問題になっていると論じた。彼によれば、シラーにとって「外国による支配」は「暴君による支配と同義」であり、愛国的なモチーフにおいても、外国による支配のもたらす「抑圧と非人間性」こそが

問題にされているという。¹²⁾

たしかに『オルレ안의処女』では「外国による支配」からの解放が課題として浮かび上がっている。そしてジャンヌという人物像にのみ注目するならば、たしかに、支配や専制への抵抗という主題がくっきりと明らかにされている。この劇の冒頭でジャンヌは、チボーをはじめフランスの敗北をすっかり甘受しているような男性たちを前に熱く抵抗を説く。「この国が減びてもよいのですか。この誉れの国、永遠にめぐるお日様のもとのいちばん美しい国（・・・）この楽園が、他国のくびきにつながれてもいいのですか。」（NA 9, 178）

けれどもこうした熱い情熱は、他の登場人物たちとの間では孤立して見える。前節で見たように、「外国による支配」をはねつけねばならないという意識は、ここに描かれた世界の中でけっして皆に共有されていないのだ。『オルレ안의処女』がただ侵略への抵抗だけを主題にしているととらえると、描き出された状況を正確に見ることはできないだろう。すでに述べたように、ここには抵抗する理由や理念が見失われた状況こそが描き出されていたのだ。祖国の危機が眼前にあるというのに、この危機を積極的に乗り越えるためのモチベーションや理念が失われている、これが、ここに描かれた世界の基本的なありようである。つまりこの作品では、「外国による支配」よりもむしろ「外国による支配」の事実それだけではじつは戦う理由にならないこと、戦いに理想主義的な理念を付与することができないということこそが、問題にされているのだ。そしてこのような問題状況は、一八〇〇年前後にシラーが置かれていた状況とも深く関わっているように思われる。

ここで『オルレ안의処女』の時代背景を確認しておこう。序でふれたように一八〇〇年前後のドイツ語圏は対仏戦争での敗北による混乱の渦中にあり、それを受けて愛国的な言説が力を持ち始めていた。¹³⁾ しかしだからといって「ドイツ国民」という政治的なアイデンティティ形成が広く受け入れられていたわけではけっしてない。¹⁴⁾

そもそも神聖ローマ帝国の緩やかな枠組みのもとに多数の領邦国家が林立していたドイツ語圏では、「祖国」や「愛国情」の観念をうちだすことに困難がとれない、よりよい社会を求める市民知識層の政治的な情熱も、国の枠組みより個々人の道徳性に重きを置くコスモポリタニズムのかたちをとって表現されることが多かった。レッシングは自分には祖国愛が理解不能であると明言して世界市民としての立場を強調したし、¹⁵⁾ ヴィーラントも「祖国」や「愛国」の観念への懐疑心を隠さず、¹⁶⁾ 国の枠組みよりも普遍的な道徳性に信頼を置くコスモポリタンの姿勢を明確にしていた。¹⁷⁾ またパトリオティズムを前面に出した言説も、基本的にはコスモポリタニズムと同じく、現実社会に批判のまなざしを投げかけながら社会における「人間性」の増大を希求するという方向性を持っており、コスモポリタニズムとパトリオティズムの区別はきわめて曖昧であった。¹⁸⁾ クロップシュトックら愛国的な作家もまた、祖国の観念のみではなく自由の観念や「人間的なもの」の理想に強く惹き付けられていたのである。¹⁹⁾

対仏戦争によって愛国的な気運が強まりはじめたときも、ゲーテやヴィーラントらヴァイマルの文豪たちは、一貫して啓蒙主義的なコスモポリタニズムの継承者としてふるまった。²⁰⁾ プロイセンやオーストリアが敗北するたびにフランスに有利なかたちで和平がもたらされたことも、彼らにとっては必ずしも悲観すべきものではなく、²¹⁾ ナポレオンの登場やリュネヴィル条約も、むしろ新しい時代をもたらす希望として歓迎されたのである。²²⁾

パトリオティスティックな空気が高まる一方で、啓蒙主義的なコスモポリタニズムも色濃く残されている。そんな時代にあって、シラーはどのような立場をとったのだろうか。彼もまた、

自由な人間性の追及を求める作家として偏狭な地域主義を嫌っており、次のように明言している。「ただ一つの国民のために書くというのは貧しく卑小な考えです。」(NA 27, 129) ゲーテと同様彼の中にも、国の枠組みを軽視して普遍的な人間性を追及するというコスモポリタンの基本姿勢があった。そもそも領邦国家の寄せ集めであった当時のドイツにおいて、「国」という枠組み自体が信頼できないことを彼ははっきりと認識しており、ゲーテとともに書いた『クセーニエン』の次の言葉に見て取れるように、「国民」という言葉にいかなる幻想を抱いてもいなかったのである。「ドイツ人よ、君たちが国民になろうと望んでも、無駄なことだ／それよりももっと自由に、人間になりなさい、それならば可能だ。」(NA 1, 321)²³⁾

しかしその一方で、対仏戦争の成り行きとドイツ語圏の危機に対するシラーの反応は、コスモポリタニズムを共有する友人たちと微妙に異なってもいた。すなわち彼は、ゲーテやヘルダーによるナポレオン讃歌には加わらず、ナポレオンという存在について沈黙を守り続けたのである。²⁴⁾

ナポレオンが時代の寵児となった時期に、あえて何も語らないシラーの沈黙が無意味であったとは考えにくい。先に挙げたミュラー＝ザイデルが指摘するように、そこにはナポレオンへの違和感や敵対心があらわれているのだろう。²⁵⁾ 少なくともシラーが友人たちのようにナポレオンへの期待を積極的に語らなかつたことは事実であり、またリュネビル条約をたたえる詩を出版者に頼まれて断っていることにもわかるように、フランスの覇権に押されるかたちで「和平」がもたらされる状況を憂慮していたこともたしかである。

『オルレアンの処女』の完成と前後する一八〇一年に、シラーは一遍の詩を書いている。無題のまま断片として残され、後に『ドイツ人の偉大さ』と名付けられたこの詩には、当時の彼の複雑な立場がそのまま明らかにされている。この詩の中でシラーは、一方で、コスモポリタンの立場を今一度明確に打ち出している。「ドイツの帝国とドイツの民族は別物だ。ドイツ人の尊厳は君主の頭になんか載っていない。政治的なものから遠く離れたところにドイツ人は自らの価値を築き上げてきたのであり、かりに帝国が没落しようとも、ドイツの尊厳は傷つきはしない。」(NA 2, 431) 「国」が君主の私物としてしか存在していないという批判的な現状認識に基づいて、シラーはここで今ある「国」の枠組みを空しいものと断じている。その一方でシラーは、ナポレオン戦争によってドイツ人の誇りが傷つけられたことに対する憤りを隠さない。ドイツの民を「踏みにじる思い上がった諸民族」(NA 2, 431) への敵意もあらわに、ドイツ人が「頭を上げて自尊心とともに諸民族の列に並ぶ」(NA 2, 431) ことを強く求めている。

ナポレオンを歓迎したヴァイマルの友人たちとは違って、彼はナポレオンの侵略に憤りを隠さなかった。言い換えれば彼の中には、啓蒙主義的なコスモポリタニズムに静かに休らったままにしていることのできない部分がたしかにあったのである。かといって彼は、国よりも普遍的な人間性に目を向けるコスモポリタンの基本姿勢を手放そうとしたわけでもなかった。上の詩を見るかぎり、ドイツの危機を前にしたシラーのあり方は、きわめて両義的であったといえる。

『ドイツ人の偉大さ』においてシラーは、信頼できない「国」の枠組みにかわってドイツ人のための戦いを正当化するための理念として、文化ナショナリズムの観念を取り入れている。詩にはこうある。ドイツの尊厳とは何よりも「文化と民族の性格の中に住まう、政治的な運命とは無関係な道徳的な偉大さだ」(NA 2, 431) 「我々の言語は、世界を支配するだろう」(NA 2, 432)²⁶⁾ このように言語や文学を通して共同体を形成しようとする文化ナショナリズムの傾

向は、コスモポリタニズムの傍らで、一八世紀を通して多くの知識人に共有されてきたものでもあった。²⁷⁾ だがシラーは、この詩を結局断片のまま放棄して、文化ナショナリズムをそれ以上追及しようとはしなかった。そして神聖ローマ帝国が名実共に解消される前年の一八〇五年に世を去っている。解放戦争以降の時代の人々とはちがって、シラーは、文化ナショナリズムをそのまま政治的な闘争の原動力と明確に位置づけることも、政治的なナショナリズムに接続させてゆくこともなかったのである。

侵略の危機に立たされながら、これに抵抗して戦うための理念が見失われている——そのような『オルレ안의処女』の状況は、上に見たシラーの両義的なあり方と無関係ではないように思われる。この作品には、他国の侵略を危機として受け止めながらも守るべき価値あるものとして国が存在していないという、シラーの置かれた状況が、まさにかたちをかえて取り込まれているのだ。『オルレ안의処女』に描かれた、戦う理由としての「愛」が失われているという状況は、「人間的なもの」への希求をそのまま政治的な自己主張に接続させることのできた啓蒙の時代が終わりつつあることを端的に表現している。同時にそこには、「ナショナリズム」という戦うための新しい理念にまだ覆いつくされてはいなかった、過渡的な時代のありようをも重ねることができる。

コスモポリタニズム的思考回路を保持しながらナポレオンに危機感を抱いたシラーは、曇りないコスモポリタンとしてふるまい続けた人々とも、祖国の危機に押されてそのままナショナリズムに舵を切った人々とも違う、曖昧で矛盾した場所に立ち止まっている。そしてそのような場所でこそ見えて来る、過渡的な時代の孕んだ困難が、『オルレ안의処女』の作品世界にもたしかにすくいとられている。

3. 「神の啓示」という「実験」

シラーが描いたジャンヌは、優しくしとやかでありながらも並外れた情熱を内に秘めた少女である。彼女を慕う村の青年レイモンはこんなエピソードを語っている。

思い出してごらんください。いつかこの人が、おれたちの家畜を荒らして、羊飼いの皆をふるえあがらせた、猛り狂った、あの虎ほども大きいオオカミを打ち取ったじゃありませんか。この娘さんたった一人で牝獅子のようにオオカミとたたかって、血まみれの口にくわえていく羊を奪い返したのですよ。(NA 9, 174)

このエピソードは、ジャンヌがただ受動的に神の僕として戦ったわけではないことを明らかにしている。フランスの地を荒らすイギリス軍への闘争心は、家畜を荒らすオオカミを前に一步も引かなかった、そのたぐいまれな激しい気性に根ざしてもいたのである。

オオカミに憤るジャンヌの姿には、ナポレオンによってドイツ語圏が追いつめられるさまを目の当たりにしたシラー自身の姿もまた重ねることができるだろう。先に見たように、シラーはコスモポリタニズムとナポレオン戦争のはざまで、「戦うための理念」を手にすることができない状況に置かれていた。「外国による侵略」に対する怒りを理想主義的に昇華させるためには、啓蒙主義的なコスモポリタニズムではもはや通用しない。しかし、いまだ君主の私物でしかない祖国もまた、市民的な理想主義の受け皿とはなりえない。そのような状況において戦

うための理念はつかみがたく、侵略に対する怒りも、群れを襲うオオカミへの原初的な怒りのようなものとしてしか存在しえない。

シラーとジャンヌが違うのは、ジャンヌには「神との約束」というかたちで、その原初的な怒りに人間社会の外から理念的な後押しが与えられたということである。今一度繰り返すならば、この作品に描かれた世界は、私的な愛が政治的な戦いを「人間的なもの」につなげる媒体として機能していないため、そのままでは政治的な戦いを理想主義的なものに接続させることができない構造になっていた。しかしそのかわりに、ここには「神との約束」が導入されている。ジャンヌによれば、彼女が聞いた「神のお告げ」とは次のようなものであった。

お前はあらがねを手足にまとして
やわらかい胸を鉄の鎧でつつめ。
男の愛がむなしい地上の喜びの
罪ぶかい焔で、お前のところにふれてはならぬ。
(・・・)
いとし子がお前の胸にすぎることもないであろう。
しかしお前を、戦いの誉れでもって
世のいかなる婦人にもまして高めるであろう。(NA 9, 181)

このように『オルレアンの処女』の世界には、「男の愛」や「いとし子」という私的な愛に文字通り取って代わるものとして、超越的な「神との約束」が導入されている。そしてこれが、剥き出しの怒りによる原始的な戦いをより尊いものへ、理想主義的なものの発露へと昇華させる役割を果たすのである。神の言葉によって戦いを「誉れ」とすることのできるジャンヌの物語は、一八〇〇年前後のシラーにとっては拒まれていた可能性を、フィクションの世界でかりそめに実現させたものとしてとらえることができよう。

ただし、それはけっして作者の願望の投影ではない。つまり、超越性を味方につけて戦いを神聖化させたジャンヌの姿は、作者や時代にとっての理想像というのではなく、以下に見るように、あくまでもひとつの思考実験として提示されていると思われるのだ。

ジャンヌの聖なる戦いは、神の後楯を得たからといってけっして迷いなく進んではいけない。というのも彼女は、人間社会を超えた世界と結びついて不思議な力を得たとはいえ、聖なる存在になり変わったわけではないのである。彼女はあくまでも人間として存在し続け、人間のまま戦いの現実に向き合わされてゆく。彼女はまず、戦いの中で若い敵兵をその手にかける。歴史上のジャンヌ・ダルクが人を殺さなかったと伝えられているにもかかわらず、あえて差し挟まれたこの血なまぐさい殺害のエピソードは、ジャンヌ自身にまだ彼女の「人間性」を自覚させはしないものの、聖なる戦いと「人間性」の不協和音をすでに予感させる出来事である。さらにジャンヌは、敵軍の指揮官ライオネルと対峙したとき、その顔にふと魅せられて恋に落ちてしまう。彼女を混乱に突き落としたこの恋は、「地上の愛を捨てる」という誓いが「人間」には所詮非現実的であるという事実を、否応なく明らかにしている。このように『オルレアン』においては、「神との約束」によって戦いに高次の意味が与えられたからといって、戦いそのものが理想主義的な色彩で染め上げられるわけではなく、逆に「人間」としての困難にぶつかるジャンヌの姿を通して、高次に意味付けられた戦いそのものの可能性が問い直され

るかたちになっている。この作品においては、「神との約束」を実験的に導入することによって次のような問いが検討されているのだ。すなわち、現実において手にすることの出来ない「戦うための理念」が、もしも実際に与えられたらどうなるのか。どのような可能性が開かれ、またどのような問題が生まれうるのか。そしてさらに、そのような理念を人間が手にすることなど、そもそも可能なのか。

『オルレアンの処女』の筋の流れは、この最後の問いに対して懐疑的な答えを予想させるものとなっている。ライオネルへの恋によって神との誓いを破ったあと、ジャンヌの不思議な力は消え、それまでのように戦えなくなる。彼女は超越的な世界の後楯を失ってしまったのだ。神との約束によって彼女が手にした「戦うための理念」は、ここでは結局見失われている。

興味深いことに、シラーの描いたジャンヌは、「戦うための理念」が失われた後も戦いを続ける。「魔女」と糾弾されてフランス軍を去った彼女は意気消沈したままイギリス軍にとらえられるが、フランス軍との戦いが始まると、再びその愛国心が燃え上がる。この最終部分で、彼女は神の言葉を受けた聖なる者としてではなく、ただ純粹に侵略に憤る者として描かれており、その愛国的な情熱も直接的な言葉で語られている。「イギリスは滅んでしまえ！フランスよ、勝て！奮い立て、勇士たち、奮い立てよ。」(NA 9, 308)ここに表現されているのは「戦うための理念」など持たない剥き出しのままの原初的な闘争心であり、そのような闘争心に立ち返ることによってようやく、ジャンヌは再び戦う力を取り戻したのである。

この作品では、「神との約束」を導入することで「戦うための理念」が与えられた世界が実験的に作り出されながら、結局、高次の理念に支えられた戦い、超越性によって正当化された戦いを人間社会のものとするのは、断念されている。「神との約束」を生きようとしながらも「人間」としての生を捨てきれず、理念を持たない原初的な戦いに立ち戻ったジャンヌの姿を通して、戦いを正当化する理念があくまでも人間の社会の外にあり、超越的な世界の言葉としてしか存在していないことが、くっきりと浮き彫りにされているのである。

コスモポリタンの啓蒙時代とナショナリズムの時代のはざまにあって、過渡的な時代状況をシラーがどのように見据え、これにどう取り組もうとしたのか。このことを、『オルレアンの処女』にかいま見ることができるだろう。戦いの中で「神との約束」を手放さざるをえないジャンヌの姿は、戦いを曇りなく正当化してくれる理念が「人間」のものにはなりえないことを、浮かび上がらせている。そして「神との約束」から離れたまま戦いを続けようとする彼女の姿は、そのような不可能性を抱えたまま内心の「侵略への怒り」に向き合い続けるしかない、という作者の現状認識を、物語っているように思われる。政治的な自己主張が必要な危機の時代にあるにもかかわらず、そのような自己主張の「人間的な」拠り所が決定的に失われている——この現実を透徹した目で見つめながら、それでも可能な自己主張のかたちを模索しようとする姿勢が、すべてを失ったまま戦い続けるジャンヌの姿に明らかにされている。

註

- 1) Vgl. Walter Müller-Seidel: *Friedrich Schiller und die Politik. Nicht das Große, nur das Menschliche geschehe.* München 2009, S. 160 u. 165.
- 2) ナショナリズムの問題とシラー受容の関係性については以下を参照。Otto Dann: „Friedrich Schiller in Deutschland und Europa.“ In: *Aus Politik und Zeitgeschichte.* (Beilage zur Wochenzeitung > *Das Parlament* <.)

- 9-10/2005, S. 23-31.
- 3) その代表的な例として以下が挙げられる。Benno von Wiese: *Friedrich Schiller*. Stuttgart 1959, S. 735.
- 4) 『オルレアンの処女』と時代背景との関係性を扱った研究にはおもに以下が挙げられる。Peter-André Alt: „Auf den Schultern der Aufklärung. Überlegungen zu Schillers ‘nationalem’ Kulturprogramm.“ In: Peter-André Alt, Alexander Kosenina, Hartmut Reinhard und Wolfgang Riedel (Hrsg.): *Prägnanter Moment. Studien zur deutschen Literatur der Aufklärung und Klassik. Festschrift für Hans-Jürgen Schings*, Würzburg 2002. (なおアルトはこれとほぼ同じ内容でシラー没後二〇〇年の二〇〇五年に論文発表と講演を行っている。Vgl. Ders.: „Ästhetische Revolution, fremder Staat, ferne Nation. Schiller und die Politik.“ In: *literaturkritik.de*, 7/2005, Nr. 1, S. 33-50); Seidel 2009, S. 158-172; Hans-Georg Pott: „Heiliger Krieg, Charisma und Märtyrertum in Schillers romantischer Tragödie ‚Die Jungfrau von Orleans‘.“ In: *Athenäum: Jahrbuch der Friedrich-Schlegel-Gesellschaft*. 20. Paderborn; München; Wien; Zürich 2010, S.111-142.
- 5) Alt 2002, S. 231.
- 6) Pott 2010, S. 117.
- 7) 本論文中においてシラーのテキストは以下を用い、引用箇所には括弧内に巻数とページ数を記す。*Schillers Werke. Nationalausgabe*. Begründet von Julius Petersen, fortgeführt von Lieselotte Blumenthal und Benno von Wiese. Im Auftrag der Stiftung Weimarer Klassik und des Schiller-Nationalmuseums Marbach am Neckar. Hrsg. von Norbert Oellers. Weimar 1943 ff. なお訳文は以下の翻訳を基礎にしている。野島正城訳、「オルレアンの処女」、『世界文学大系第一八巻、シラー』、筑摩書房、1959年、354-414頁。
- 8) Vgl. Jürgen Habermas: *Strukturwandel der Öffentlichkeit. Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft: mit einem Vorwort zur Neuauflage 1990*. Frankfurt a. M. 1990, S. 107-115.
- 9) これについては、以下の拙論でより詳細に論じた。菅利恵、「愛による主体化—シラーの劇作品をめぐる試論」、『研究報告』第23号、京都大学独文研究室2009年、1-15頁。
- 10) これについては、以下の拙論でより詳細に論じた。菅利恵、「『ウィルヘルム・テル』における愛と政治」、『希土』第36号、希土同人社、2011年、65-89頁。
- 11) これについては、以下の拙論でより詳細に論じた。菅利恵、「『マルタ騎士団』論—フリードリヒ・シラーにおける「男同志の愛」」、『人文論叢』第29号、三重大学人文学部文化学科、2012年、93-106頁。
- 12) Müller-Seidel 2009, S. 166.
- 13) 対ナポレオン戦争の過程でナショナリズム的な空気が強められていった経緯については以下に詳しい。Christoph Prignitz: „Vive l’Empereur. Zum Napoleon-Bild der Deutschen zwischen Spätaufklärung und Freiheitskriegen.“ In: Harro Zimmermann (Hrsg.): *Schreckenmythen-Hoffnungsbilder. Die Französische Revolution in der deutschen Literatur. Essays*. Frankfurt a. M. 1989, S. 106-121.
- 14) ドイツ語圏における初期ナショナリズムの勃興の経緯については以下を参照。Jörg Echternkamp: *Der Aufstieg des deutschen Nationalismus (1770-1840)*. Frankfurt a. M. u. New York 1998, S. 42-162; Hans Kohn: *The Idea of Nationalism. A Study in Its Origins and Background*. New York 1944; Christoph Prignitz: *Vaterlandsliebe und Freiheit. Deutscher Patriotismus von 1750 bis 1850*. Wiesbaden 1981.
- 15) Lessing an Gleim. Feb. 14. 1759. In: *Sämtliche Schriften*. Hrsg. von Karl Lachmann und Fr. Muncker. Bd. XVII. Stuttgart 1904, S. 158. レッシングのコスモポリタン志向とパトリオティズム批判については以下を参照。Sigrid Tielking: *Weltbürgertum. Kosmopolitische Ideen in Literatur und politischer Publizistik seit dem achtzehnten Jahrhundert*. München 2000, S. 25. また一八世紀におけるコスモポリタニズムについては他に以下を参照。Andrea Albrecht: *Kosmopolitismus. Weltbürgerdiskurse in Literatur, Philosophie und Publizistik 1800*. Berlin 2005, S. 82-192; Irmtraut Sahmland: *Christoph Martin Wieland und deutsche Nation. Zwischen Patriotismus, Kosmopolitismus und Griechentum*. Tübingen 1990; Rudolf Vierhaus: *Deutschland im 18. Jahrhundert. Politische Verfassung, soziales Gefüge, geistige Bewegungen*. Göttingen 1987, S. 96-109; Michaela Wirtz: *Patriotismus und Weltbürgertum. Eine begriffsgeschichtliche Studie zur deutsch-jüdischen Literatur 1750-1850*. Tübingen 2006, S. 7-23.

- 16) Christoph Martin Wieland: „Ueber deutschen Patriotismus: Betrachtungen, Fragen und Zweifel.“ In: *Werke*. Bd. XV. Hrsg. Von Wilhelm Kurrelmeyer. Berlin 1930, S. 586-595, hier 587.
- 17) ヴィーラントのコスモポリタニズムについては以下を参照。Sahmland 1990.
- 18) Sahmland 1990, S. 252.
- 19) Kohn 1944, S. 392; Prignitz 1981, S. 35 f. ただしナポレオン戦争以前の愛国の言説に「人間性」の道徳とは相容れない排外主義的な側面がなかったわけではない。Vgl. Hans Peter Hermann, Martin Blitz und Susanne Moßmann(Hrsg.): *Machtphantasie Deutschland. Nationalismus, Männlichkeit und Fremdenhaß im Vaterlandsdiskurs deutscher Schriftsteller des 18. Jahrhunderts*. Frankfurt a. M. 1997.
- 20) Vgl. Fink 1993, S. 38.
- 21) Vgl. Müller-Seidel 2009, S. 214-216.
- 22) Vgl. Müller-Seidel 2009, S. 214-216. なおこの辺りの事情については以下の拙論でも論じている。菅 2011年。
- 23) シラーのコスモポリタニ的な側面については以下に詳しい。Alt 2002, S. 227.
- 24) Vgl. Müller-Seidel 2009, S. 216 f.
- 25) Ebd. さらにミュラー＝ザイデルは、シラーのナポレオンに対する反感を伝える証言として、カロリーネ・フォン・ヴォルツォーゲンによる一八三〇年のシラー伝からの一節をひいている。「この征服者に対してシラーは好意や信頼を決して持ちませんでした。彼はナポレオンによって人類に何か良いものをもたらされるなどと期待したことはなかったのです。専制的支配者のたたずまいは彼の自由な魂にとって堪え難いものでした。」 Zit. nach Müller-Seidel 2009, S. 217.
- 26) Vgl. Kohn 1944, S. 342 ff.
- 27) Vgl. Kohn 1944, S. 342 ff.